Osaka University Knowledge Archive

Title	社会変動の中での個人の名づけ実践 : 中国山東省李氏宗族の調査に基づいて
Author(s)	王, 愛静
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 197-208
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77834
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

社会変動の中での個人の名づけ実践

—中国山東省李氏宗族の調査に基づいて—*

王　愛静**

キーワード：社会変動、名づけ実践、個人の個体性

本文站在个人的角度，考察了山东省李氏宗族的起名实例，试图了解在社会发生重大变革，传统观念和习俗受到冲击的时候，个人是如何实现对子女的命名的。

玉清等5人都是受了传统的道德文化教育，祖先观念比较强的人，同时，他们历经了新中国成立以来的各项政治运动和文化革命。在子孙的命名上，是遵循老的传统，还是适应新的变革，他们有各自不同的态度，采取了不同的行为。玉清受过高等教育并积极上进，年轻时不甘落于人后，给儿子起了两个很革命的名字。但是，后来却为没有起辈名而有些不安。在孙子的起名上，坚持用字辈，了却了自己的心愿。对他来说，儿子的名字是对当时社会的暂时的适应，而孙子的命名才是他真正的意愿所在。兴业被划分为地主成份，深受歧视。但他认为子孙繁衍、宗族昌盛是引以为豪的事情，所以给子孙都起了辈名。但是为了不受更多的批判，他把字辈和其他文字巧妙结合起来，解释为赞美党和国家的名字。而可正处于领导者的地位，凡事冲在前面，并担心别人告发自己难舍宗族意识，自然给儿子起了比较革命的名字。志圣则自始至终提倡传统的命名习俗，认为起辈名并不是反党行为。特别是20世纪90年代以来，弘扬宗族文化成为他的人生意义。

如此等等，他们虽然处于同一个时代，同样受到社会变革的影响，但各自又有不同的性格、经历、信念等。因而在起名这一行为上，根据各自的不同情况各有自己的想法和策略。毋庸置疑，家庭的教育、社会的变革以及周围人的影响等这些社会关系都对个人行为起到了重要的作用，但是个体性的差异，带来了人们对同一事物的不同看法，带来了生命的多姿多彩。应该是我们在全面、客观评价一个事物时不可缺少的视点吧。

1　はじめに

中国を対象にする人類学・社会学的研究では、90年代以降、社会主義革命や改革開放などによる社会の変化が注目されるようになり、とくに中国の農村における親族構造・人間関係などの産業近代化における変容過程とその要因を究明しようとする動きがある。その成果としては、中生（1990）、聶莉莉（1992）、富田（1993）、韓敏（2001）、秦

---

* 对社会变动中个人的命名实践的考察－以山东省李氏宗族的调查为例－（王爱静 WANG Aijing）

** 中国海洋大学外国語学院

兆雄（1999）、佐々木・柄澤（2003）などが挙げられる。しかし、上に挙げた研究のほとんどは、対象村落あるいは宗族を一つの単位として捉え、その全体像のイメージ変容や構造上の変化を明らかにしようとしたものである。そして、その伝統変容が中国政治・経済政策の実施など「外部」要因による環境の変化や文化習慣の変容に応じて起こったものと考え、個人への視点がないのである。

確かに、個人の行為や活動は社会関係と分かちがたく結びついており、社会変化および自分以外の者との関係をぬきにしては語られない。個人は社会で共有されている規則、価値や規範にそって生きていくのである。しかし、それは一方的に社会変動に順応し、価値や規範にそって単純に生きていくものでもない。田辺繁治（2002）で述べられているように、人の日常的実践は、「それぞれの場面において能動的に社会にかかわりながら社会的世界を構築していく過程にほかならない」（田辺 2002：3）。つまり、個々人はその時々の状況の変化に対応しながら実践を生み出すのである。本稿では、名づけ実践を例として、社会変化の中で、個人がいかに実践を通して、日常的な営みの中で自分の生き方を探求するのかを明らかにしていきたい。

2 研究対象

筆者は 2001 年から中国山東省にある李氏宗族の人名変化を調査している。その成果はそれぞれ王愛静（2004）と王愛静（2007）にまとめた。前者は主に農村を対象に、人名形態の歴史的変化および国家政策や政治運動がその変化にあたえた影響を考察しており、後者は農村部と都市部の両方を調査し、社会変動に伴う人名変化における地域差を明らかにすることを目的とした。本稿の研究対象は引き続き以上の研究で扱った李氏宗族の人々を対象とし、個々人へのインタビュー資料に基づいて論述する。

3 習慣的な命名行為とその変容

長い歴史の中で、中国では独特の名づけの習俗が形成されてきた。とくに目下の名前は目上の実名を避けて名づけるという「避祖諱」習俗、輩行字を使って名づける輩行字命名の習俗[1]は中国の広い地域にわたって行われていた。この二つの習俗は宗族の系図を記載する族譜に明記されている場合が多い。『李氏族譜』（1926 年）巻一の「凡例」には、「命名有犯先世諱者、有重同世名者、以前不可復更、以後勿得再犯」（句読点及び訳は筆者、以下同様）（先世の名前を犯した者もいれば、同世代の名前と同名になった者もいる。以前の名前は変更できないが、今後はこの禁を犯してはならない）と記され

[1] 輩行字命名の習俗と「避祖諱」習俗の詳しくは王愛静（2004:146-147）と王愛静（2007:73-75）を参照。

ている。輩行字命名については、1845年版の族譜にすでに「茲與族人約、嗣後命名必統一於一字、世世相承、無分支派遠近。」（今宗族の人と約定して、以後の命名は、同輩は必ず一文字に統一して名づけ、代々継承し、支派・血縁の遠近の別を無くす）と規定されていた。この二つの命名習俗は、族譜などの書籍に文字という見える形で記載されているから、人々はそれをを採用しなければならないのだろうか。決してそうではない。というのは、中国では族譜の編集、印刷などは人材、財力とも必要なため、むしろ族譜を持たないで、命名習俗はただ口承されてきた宗族のほうが多いからである。また、なぜこのように名前をつけるのかという質問に対して、古老のインフォマートの多くは次のように答えた。「それは大昔からのしきたりだよ、祖先はみんなそうしたんだから」、「祖父の名前を名づけるというのか？それは祖先への大きな不敬だ。おかしい質問だね」。このことから、彼らはなぜそのような名づけ方をしなければならないのかという理由をはっきり知らない、或いは知る必要がないと考えていることが分かる。子供が生まれ、その世代に使う輩行字を確認し、年長者に輩名をつけてもらい、族譜編集の際に記入する、これは一連の極自然な行為で、当たり前のことである。また実は、「避祖諱」習俗と輩行字命名の習俗は、単独で孤立して存在するものではない。それは家父長制を特徴とする中国家族制度の一環であり、宗族内部の秩序を維持して、血縁等級の関係の中ではっきりと認められた各個人の権利と義務を履行するという意識を強める手段である。2千年にもわたる封建社会の中で、これらの名づけ習俗は家父長制の下、その他の慣行と同じようにすでに人々の体に染み付いていた。

王愛静（2004）で考察したように、命名の伝統習慣を動揺させたのは中華人民共和国の設立以降に起きた一連の社会変革である。共産主義思想の下で、1950年祠堂の土地を没収することを含める土地改革、1958年大躍進運動（この運動の中で、祖先の墓を平らにして農耕地にする「起墳」運動が起こった）、宗族単位が集団単位に入れ替えられる人民公社化運動、伝統道徳の革命ともいえるプロレタリア文化大革命が相次いで行われた。それらの社会変革のなかで、宗族文化、宗族制度は最も大きな衝撃を受けて、衰退してきた。宗族文化の表出符号としての輩名も影響を受けている。図1に示すように、調査地における男性の輩名は50年代以降減少する一方である。またその一方、その変化線は次第に下降するのである。もし輩名の命名が法律などで明示的に禁止されたのであれば、禁止された時点から、急激に減少しゼロに近づくはずである。つまり、輩行字命名の習俗が廃れたり或いはある程度維持されたりしているのは、法律などの強制的手段によりもたらされた結果ではなく、人々の個人的な判断でこの命名習俗を放棄したり保ったりした結果なのである。

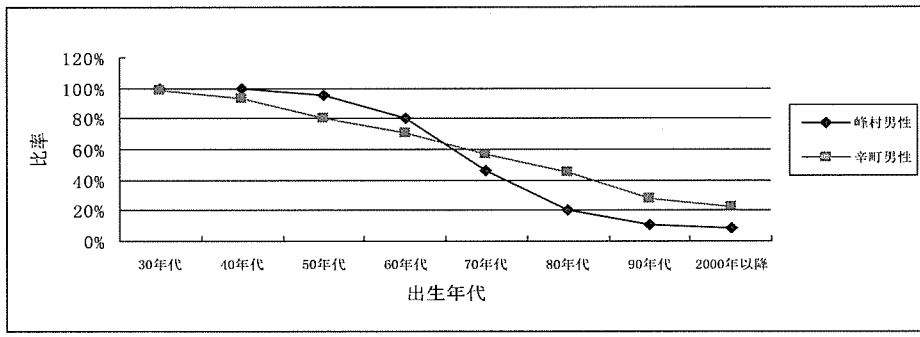

図１　調査地男性輩行名の年代変化

4　名づけの実例分析

本節では、個々人の具体的な名づけ行為を分析してみたい。紙幅の関係で、調査地で行ったインタビュー全てを記述することはできないため、五つの例のみを取り上げることとする。なお、条件をなるべく均一にするため、調査対象を60～80歳（2008年時点で）の男性に絞ることにした。彼らは伝統的な家庭教育を受けており、しかも一連の社会主義革命を経験した点で共通している。

4．1　慣行と革新の間で揺れ動く名づけ－玉清の例－

1947年生まれの玉清は物心が付いた時に土地改革が行われ、小学校時代に集団生産が組織された。文革が始まったころ、彼はちょうど高校2年生であった。農村の経済改革後、病院院長や工場の衛生所所長を経て、自分でクリニックを開業するに至った。村の中で、彼は新時代の高等教育を受けた数少ない人間の一人で、社会の変動をより早く感知し、新事物を受け入れる覚悟がある人である。文化大革命が始まってまもなく、高校生だった彼は、造反隊に加入し、学校の先生を批判したり[2]毛沢東の接見をうけたりした経験を持っている。その一方で、玉清は5人兄弟の長男で、両親、とくに父の影響で、「祖先の祭祀を怠ってはいけない」「長幼有序」（年長者と年少者の間には守るべき秩序がある）、「孝悌仁愛」（両親に孝行し、兄など目上の者によく仕え、思いやりがある）という宗族道徳観念が強いようである。玉清の息子はそれぞれ71年と72年、文革中期の生まれである。いつまでも優れた人間であるようにという期待を込めて「永傑」「永偉」

[2] 文化大革命の「一切を否定する」思想の下で、学問や知識は批判されていた。紅衛兵運動の中で、全国の学生たちは「停課闹革命」（授業を辞めて革命をやる）ようになり、全国的な大経験交流（大串連）が起こった。紅衛兵は故郷に帰ると、「造反有理」（造反には理屈がある）というスローガンを武器として、まず学校に造反した。玉清はこのことを振り返って、次のように言った。「いまからすればとんでもないことをしていたが、当時同級生のみんなはそうしたから、自分もそうするしかなかった」。

と名づけた。「何といっても、自分は村の中でよく知られている。古臭い名前をつけたら人に笑われるだろう、新時代に相応しい名前をつけようと思った」。ただし、それは幼名とし、、学齢に達すれば、学名を別につけるつもりであった。「心の中では、学名はやはり輩名のほうがいい」と思っていたようである。しかし、彼はその後、意味もよく、他人と重複しない名がなかなか見つからず、キリスト教信者である妻の反対もあり、結局幼名をそのまま学名にしたということである。「当時、わざわざ革命的な名前への改名すら行われていたよ。だから、特に輩名にこだわらなくてもいいかと思ったんだ」。しかし、文革後、時代が下るにつれ、玉清の心の中に、なんとなく「遺憾」（気が晴れない）な思いが沸いてきたという。その思いを補ったのは1999年生まれの孫への名づけである。孫の名前について、玉清の希望は、輩行字「正」をつけることと家族の期待を込めることであった。最終的に、「路正」という名前に決めた。この時も妻は輩名をつけることに反対したが、彼は聞き入れなかった。また、後に家族は、陰陽五行命名の本に基づき、「路正」という名前の画数はよくないので、家昌などの名に改名したらどうかと提案したが、玉清は「どうしても変えたければ、「路」を「璐」とかにしたらいい。輩行字を残してくれ」と反対し、結局改名は行われなかった。

玉清は息子の名前、特に学名としての名前を決めたとき、あれこれと思い惑ったことがうかがえる。宗族への帰属を表している輩行字命名を放棄しがたいと思いながら、若かった彼は、革命の激情に誘われ、時代にふさわしい名前をつけたいとも思った。最終的に息子に非輩名をつけた。それは妻の反対、いい輩名が見つからなかったという理由があったことは疑いないが、革新的な名前が格好いいという彼自身の考えが一つの決め手であっただろう。もう一つ重要な点は、玉清が当時思いついた輩名候補は全て「他人と重複していた」ことである。重複すると、「同世代の場合、同姓同名になるのでよくない。上の世代と同じ字を名前につけるのは絶対だめで、忌諱だ」というのである。つまり、輩名よりも、「避祖諱」へのこだわりが強いことが分かる。これは興味深いことである。文化大革命が終わった後、宗族批判の風潮が収まり、玉清も冷静に反省し、以前の命名慣行を懐かしく思い、孫に輩名をつけてもらった。今度の決心はいかにも固く、反対されても変わらなかった。つまり、息子の世代では、命名の際祖先から伝わってきた輩行字体系から「離脱」したが、孫の世代では無事に「回帰」を果たしたのだ。玉清はこれで人生の一つの願い事がかない、安心したようである。さらに、「できれば曾孫にも伝統的な名づけをして欲しい。それは家族が繁栄していく印です」と自分の意志を家族内で貫徹しようとしている。

4. 2　巧妙な対応で慣行を始終貫徹した名づけ－興業の例－

興業は1928年の生まれである。土地改革の時代、祖父の世代から多くの土地を持っていたため、「地主」という不利な階層に区分された。土地は没収され、家族全員は長年にわたり人々から疎外されていた。激動の時代の中で、興業が自分を守る術は「言動を慎重に」し、「余計なことを一切口にしない」で、黙々と分配された仕事をやることであったという。その彼には、息子が3人、孫が2人おり、全員慣行どおりに輩名がついている。社会変動は彼の名づけに少しも影響していないかのように見えるが、実際はどうであろうか。

興業の長男が生まれた時、ちょうど一家は地主という不利な階層に区分された暗い時期であった。子供の誕生はまさに光のように一家に希望を与えた。興業の父は喜んで、幼名を「照光」とした。また、「照光」という子は、村の李氏宗族の20世代の一人目であり、その誕生とは、一族の新たな世代の誕生ということであった。興業はこの上もない誇りと希望を覚え、どうしても学名に輩名をつけたかった。しかしながら、宗族概念と容易に結び付く輩名は、自分に悪い影響をもたらさないかと心配しなかったわけではない。「根拠当時的社会情勢和自己的情況、説話不能太随便…」（当時の社会情勢や自らの置かれた情況から考えて、やはり言動に気をつけなくては）と慎重な気持ちもあった。しかし、結局、興業より2世代上の長老である志珍が提案した名前「一郷」にした。「一」は輩行字で、「郷」は当時、村より一レベル上の行政単位で、社会主義政権下の新しい区画である。「同じ郷の人なので、郷のために団結して頑張ろう」という意味が込められたという。興業の次男と三男の学名はそれぞれ「一忠」「一明」といい、「一忠」は「一心一意忠于党、忠于毛主席」（一心に共産党、毛沢東主席に忠誠を尽くす）、「一明」は「国家将来一片光明」（国の将来は光明に満ちている）という言葉に基づいている。このように巧妙につけた名前は、周りからの批判を受けることなく、無事に通り、興業も安心したようである。その後、70年代末から80年代初めにかけて、二人の孫が生まれた。それはちょうど文化大革命が終わり、新時代に入ろうとした時期であった。これからは境遇がよくなるのではないかという期待を胸に、興業は孫にそれぞれ「順起」（順調に立ち上る）「新起」（新たに立ち上る）という幼名をつけた。学名には、「中」という輩行字と巧みに組み合わせ、初孫に「建中」（中国を建設する）、二番目の孫に「強中」（中国を強くする）と名づけた。孫の命名に際しても、輩行字を使いながら無難な意味合いになるように工夫するという慎重な言動を取っていることが分かる。

興業は20世紀末、族譜の再編に熱心に参与していたことからもわかるように、宗族文化の存続と宗族の繁栄に非常に関心を持つ人である。祖先の祭祀も墓参りもできず、自分も不遇であった暗い時期には、子孫の繁栄が彼にとって、もっとも大きな慰めであ

り支えであっただろう。そのため伝統的な宗族概念が批判の対象になっていたにもかかわらず、興業は息子にも孫にも伝統的な命名法に従って命名したのである。ここで慎重な彼が取った戦略は、輩行字を巧みに組みこみつつ、共産党を賛美し、毛沢東主席への忠誠心を表すなど革命的な名前だと解釈させ、周りの批判を逃れるということであった。名づけは、ささやかな行為ではあるが、その中には、人間の知恵、戦略、そして何よりも生きる力が潜んでいるといえよう。

4．3　模範意識下の名づけ－可正の例－

可正（1928年の生まれ）は辛町の幹部であった。50年代から文化大革命が始まる1966年まで村の党支部書記を務めていた。当時の幹部は、全力で村や村の人に奉仕しており、その働き振りは現在の幹部とは完全に異なっていた、と彼は振り返っている。

1954年に長男が生まれ、就任してまもなくの彼は「事業を成功させ国に貢献するように」という意味合いを込め、幼名を「小業」、輩名を「培業」と名づけた。次男は、ちょうど整風運動が終わったばかりで、人民公社の集団生産が始まった時期に生まれた。人民公社では、「公」の利益、即ち国家と集団の利益が強調され、私的利益あるいは親族の利益を図ろうとすることは、「資本主義の道を歩む」「宗派主義」として批判された。可正は、自分が共産党の幹部なので、何をするにも、模範的な役割を果たさなければならないと思った。子供の名づけも慎重に考えないと、人に悪影響を与えるかもしれないと考えたという。「毛沢東時代には、階級闘争をかなめとした。宗族関係を断ち切るべきだとされていた。」「共産党は宗族関係を提唱していない。輩名はそれを連想させるのでよくない。」と彼は述べた。そのため、可正は輩行字を取らずに「共産党の光、毛沢東主席の光がきらきらとあたり一面に輝く」というスローガンから次男に「光輝」と名づけた。

可正は息子の命名に際して、子孫繁栄や宗族伝承などを考えるより、まず時代および自分の地位にふさわしい名前をつけなければならないと考えていた。当時宗族文化など伝統的なものが古くて悪いものとして批判されていたため、いにしえの習俗としての輩行字命名も、その時代に相応しくないはずだと思った。また、自分が村の最高指導者であり、自分の振る舞いは村人が手本とするものであるため、慎重にしないと共産党の方針を誤解させたりする恐れもある。さらに、宗族関係を提唱しているのではないかと摘発されれば、危ないことになるだろうと、地位になるべく影響が出ないようにという配慮もひそかに込められていると考えられる。

4. 4　漠然とした名づけ－玉文の例－

玉文（1944年の生まれ）は4人兄弟の長男として生まれ、小学校には1年しか通わなかった。学校を中退した後、ずっと村で畑仕事をしていた。彼には息子が2人と娘が4人いる。子供が多く、生活の負担が大きい彼は、他人のことにあまり関心を持たず、自分の家族の生活を支えるのが精一杯であった。玉文は土地改革、集団生産、反右派運動、文革など一連の運動に関しては、「よくわからない」、「社会がめまぐるしく変わっても結局同じだ。相変わらず食べ物が足りないから」と語っている。彼はよい階級とされる「貧農」であり、おとなしくて何も言わないため、各政治運動の中で批判されたことも、先に立って人を批判することもなかった。村人の話では、彼は無口で、「老実巴交」（正直でおとなしい）の典型的な農民である。二人の息子はそれぞれ文革の初めと終わりに生まれたが、二人とも輩名を持ち、それぞれ「志強」と「志林」という。4人の娘には輩行字を用いてはいないが、「永芳」「永香」「永鳳」「永輝」のように、「永」という文字を共通して用いている。長男の「志強」は玉文が付けたもので、当時よく使われる文字「強」を組み合わせて付けたそうである。次男の名前は、字が余り読めない妻がたまたま家の近くに「林子」（木が多く生えているところ）があることから名づけた。娘の名前も「適当につけた」そうである。「我々は学識がないから、名づけに対して意味なんかあまり考えていない。思いついた名前をつけただけだ」と玉文と妻は言った。

名づけについて心を砕いた玉清や可正などと異なり、玉文夫婦は子供の名前をあまり深く考えずに漠然とつけたようである。玉文が息子には輩行字、娘にも共通の文字を用いたのは、家族重視の観念や祖先からの伝統に従って命名するのが彼にとって自然であり、特に考慮する必要がなかったことの表われであろう。またその一方、「強」も「永」も当時の人名によく用いられた文字[3]で、つまり流行していた文字である。玉文は深く考えずに子供に名をつけたわけであるが、そこには時代の影響が色濃く表れている。

4. 5　ちょっと無念な名づけ－志聖の例－

志聖（1929年の生まれ）は宗族文化が破壊されたことをひどく残念だと思い、90年代以降、族譜の再編や共同墓地の建設などに最も力を入れた人物である。彼の息子3人は50年代と60年代始めの生まれであり、それぞれ「宏」「偉」「宏偉」という。宗族意識の強い志聖がなぜ息子に輩名をつけなかったのであろうか。実は、志聖の父の名前には息子の世代の輩行字「正」が入っているのである。孫の名前は祖父の名を犯してはいけないという昔ながらの習俗にこだわり、志聖はやむをえず息子に輩行字を用いなかったのである。名の由来としては、1958年に志聖が初めて天安門を見たとき、その壮観

[3] 李氏男性人名用字使用頻度の統計によると、60年代、「強」と「永」はそれぞれ1位と6位を占めている。

さに非常に感心し、「雄大、壮大」を意味する「宏」「偉」をそれぞれ長男、次男に名づけたとのことである。三男の場合、兄弟3人で仲良くしてほしいという願いも込め、2人の兄の名前を合わせることにしたという。50年代以降輩名が減少したことについて、志聖は次のように述べている。「輩名をつけることは時代遅れであるとか共産党に反対することだとかいう見方には賛同しない。人々はその特別な社会状況の下で勝手にそう思っているだけだ。人間は誰にでもルーツがあるわけで、輩名はその印以上のものではない」と独特な見解を示した。父親の名前に「正」の文字が用いられていなければ、三人の息子にも輩名をつけたことは間違いないであろう。しかしその一方、輩名をつけないことにより、志聖は「避祖諱」の習俗を守ることができた。「避祖諱」の禁を破ることは、祖先に対しての大きな不敬であり、志聖にとっては決して行ってはならないことだったのである。

息子に輩名をつけることができず、残念でならない志聖は、男の孫の誕生を心待ちにしていた。しかしながら、孫は全て女の子であった。失望した志聖は、女の子でも李氏宗族の一員であり、跡継ぎになるではないかと思い、祖先から続く輩行字を孫娘に継がせようとした。さらに、彼はその人名用字にもずいぶん工夫を施したようである。3人の孫にそれぞれ「培鑫」「培森」「培磊」(培は輩行字) と名づけた。「鑫」は三つの金、「森」は三つの木、「磊」は三つの石からなる文字で、孫三人がいつまでも仲良くし、家族のために団結して頑張ってほしいという願いが込められているのである。

5　名づけ実践のメカニズム

4では5人の名づけの実例を取上げ、それぞれの個人が当時の社会および周りの状況の変化にいかに適応しながら、なおかつ自分の思いも込めて名づけ行為を実践してきたのかを記述・分析してきた。彼らの名づけには次のような共通点が見られる。

まず、第一に、名づけの現場に遭遇した時、彼らがまず、いにしえの習俗で、輩行字を使う名づけを思い浮かべたことである。5人のうち、興業、玉文の2人は息子全員に輩名をつけ、共産党の幹部であった可正も長男に輩名をつけた。志聖は息子に非輩名をつけたが、それは、祖先の名を忌諱したためのやむを得ない行為である。しかもその後孫娘全員に輩名をつけた。5人のうち玉清だけが自分の意志で息子に非輩名をつけたが、それも前述したとおり、最初からそうするつもりではなかった。彼らはいずれも60歳代から80歳代の男性で、中華人民共和国が設立する前に生まれた人たちである。青年時代まで、少なくても少年時代まで、社会的変動が少なく、外部との連絡も少なかった平穏な田舎で過ごした。子供時代から家族の祭祀や墓参りなどの宗族活動に参加し、祖先への感情が培われてきた。昔からの命名習俗や宗族観念などを彼らは子供時代教え込

まれており、将来も当然のことのようにそれに従おうとしている。

次の共通点としては、5人の名づけには、輩名にしろ非輩名にしろ、また意識的であるかないかにかかわらず、時代的な色彩がある文字を入れたことである。それは当時、社会変革がもたらした影響を彼らがみんな実感していたからであろう。玉清は祖先の墓の破壊をその目で見てショックを受けたり、興業は地主という身分に区分され、20年近く村人に疎外されたり、可正は村の指導者として祖先の祭祀の廃止を先導していたが、後に祖父の葬式を挙げたため批判されたりするように、彼らはさまざまな社会変動を身近に感じた。50年代末から、とくに文化大革命時期では、社会変動が激しく、根付いた宗族意識や伝統的な観念への見直しを強いられた。名づけにおいて、伝統の堅守と打破の間で人々の心が揺れ動いたのは、当然のことであろう。

三番目の共通点は、名づけに対する家族や周りの人の影響が見られることである。玉清の妻の輩名への反対、興業の祖父にあたる志珍の提案、玉文の妻が玉文と一致した意見などは、多かれ少なかれ彼らの名づけに影響を与えた。身近にいる人の意見であるがゆえに、完全に無視できないものであり、自分の意見と合致する場合は決断を促し、相違する場合は決断を緩めるという影響が見られた。

しかしながら、以上のような共通点があるものの、彼らが名づけの際に取った姿勢や名前を決めた理由、採用した手段は決して一律なものとは言えない。興業は伝統的な名づけを保留しながら意識的に時代色の強い文字を入れた。彼にとっては、代々伝えられてきた輩行字命名は既に身にしみた慣習の一部であり、急に捨て去ることはできないものであったが、一方では、社会の変動も敏感に感じとり、それに反応したのである。玉文は政治運動に全く興味がなく、それに積極的に合わせようとする意識はなかったが、その名づけにも漠然とした形で社会の影響が入っている。それに対して、辛町党支部書記であった可正と若かった玉清は社会風潮に即応して徹底して革命的な名前を子供につけた。しかし、可正の場合も、最初から非輩名を選んだわけではなく、自分が党支部書記になった時にはじめて、非輩名をつけるようになったのである。社会の変化と自分の身分の変化に応じて、損得を考慮した上で名づけ方も変化させたといえるであろう。また、玉清が革命的な名前をつけた背景には、自分の革命への情熱以外に、家族の影響と名前の同名問題も関わっていた。また、同じ輩名或いは非輩名をつけたとしても、その理由が人によって異なっている。例えば、志聖、玉清、可正の三人はともに息子に革命的非輩名をつけたが、その理由は決して類似していない。個々人は名づけに当たり、それぞれの経験・社会的地位や考え方により、それぞれ異なる態度と姿勢を示し、自分の状況に対応して戦略を取ることにより、名づけを実現したのである。つまり、ひたすら慣習に従うか、変革に適応するか、それとも両方を考慮して折衷案を取るのかは人によ

り異なり、さらに同じいにしえの慣習でも、どれを優先するのかも人により違う。当然、名づけの理由も取った戦略も異なっている。これらの差は人々の個体性によるのではないであろうか。

個体とは自己特有の存在と性格とを質的に有する統一体であり、一つの有機的全体としてそれ自身のまとまりを保有するものである。ここでいう人の個体性とは、肉体的存在ではなく、精神的存在としての人が一つの個体として、自分の経験、性格、信念、価値観などを有するということである。つまり、個人の中に刻み込まれたさまざまな図式があり、ほかの人と区別されるものを持っているのである。それこそが、人々がそれぞれ異なった行動を取った原因ではないだろうか。玉清は教養が高く、しかも向上心もある。社会変動の中で他の人と同様に新事物を遅れずに受け入れたかったが、伝統的な教育により祖先への帰属感も強かった。若い頃、不承不承非輩名を息子の学名として承諾したが、孫の世代になるとやはり輩名をつけてもらい、満足した。玉清にとっては、息子への命名は当時の社会への一時的な適応で、孫への命名こそが心の底にある信念の現れである。革命の参与者としての玉清に比べ、興業は出身が悪かったため社会の中心から排除された存在であった。子孫の繁栄、祖先とのつながりこそが興業の誇りであり、何よりも重要なことである。彼は将来への希望を子供の幼名に込め、宗族の存続を明記する輩行字をすべての子孫の学名に入れている。自由な発言もできなかった時代では、興業は子供の名前を呼ぶことで、自分に希望を与え、困難を乗り越えられる信念を強めていたのではないか。玉文は理想もなく学識も少なく、正直でおとなしい人で、名づけについても深く考えなかったのである。彼は基本的に自分と関係がないことに関心を持たないタイプに属し、伝統的な理念も新たな観念も彼にとって重要なものではなく、平穏な生活だけを追及しているかのようである。可正は村の変革の指導者であり、模範意識が強かった一方、共産党の主旨に反する行動をとれば自分の前途に悪い影響が出るではないかと考える如才なさもあり、保身の意識が見られる。それに対して、志聖は輩名をつけることは共産党の指導に反対することではないと理解し、輩行字命名をずっと提唱していた。特に90年代以降、宗族文化を復興発揚することが彼の目標となり、生きがいである。

6　おわりに

本稿は個人の視点から山東省の李氏宗族の名づけ実践を考察してきた。いうまでもなく、個々人の行為や活動は社会的なもので、上の世代から伝えられてきた慣習や風俗および生きた時代の社会状況に影響されている。名づけもその例外ではない。ただし、個々人が単に慣行或いは変革の要請に服従して名づけたのではなく、自分の経験、生き方、

信念などにより、変化しつつある社会状況に対して、戦略をとりながらそれぞれ能動的に適応しているのである。個人の個体性はさまざまな名づけケースを解釈するのにより有効な概念でなはいかと考えられる。特に人の信念や価値観というものは、社会がどのように変化しても、個人がそれに適応して乗り越えられ、生き抜けるのに大切なポイントであろう。

なお、個人の個体性については、さらに細かく深く論じる余地があり、今後の課題にしたい。

参考文献

王愛静　「中国建国後の農村の人名の変化と国家政策・政治運動の背景ー山東省における二つの農村の調査に基づいてー」『大阪大学言語文化学』 Vol. 13　大阪大学言語文化学会　2004年　PP.145-160.

———　「日中人名命名法の比較に関する一考察－祖名の継承と祖名の回避－」『高岡幸一教授退職記念論文集』 朝日出版社　2006年3月　PP. 73-82.

———　「社会変動に伴う人名の変化における地域（都市／農村）差の一考察—中国山東省の峰村李氏と辛町李氏の調査に基づいてー」『大阪大学言語文化学』Vol. 17　2007年　PP. 155-167.

佐々木衛・柄澤行雄　『中国村落社会の構造とダイナミズム』 東方書店　2003年

聶莉莉　『劉堡－中国東北地方の宗族とその変容』 東京大学出版社　1992年

田辺繁治　「日常的実践のエスノグラフィ－語り・コミュニティ・アイデンティティー」田辺繁治・松田素二編『日常的実践のエスノグラフィ－語り・コミュニティ・アイデンティティー』 世界思想社　2002年　PP. 1 - 38

————　『生き方の人類学－実践とは何か－』 講談社　2003年

秦兆雄　「中国湖北省農村の宗族と政治の変化」『外大論叢』 53 (5) 1999年　PP. 37-64

富田和広　『現代中国社会の変動と中国人の心性』 行路社　1993年

中生勝美　「村の派閥争い」『文化人類学　8　中国研究の視角』 1990年　PP. 53 - 62

Min Han　Social Change and Continuity in a Village in Norther Anhui,China:A Response to Revolution and Reform　国立民族学博物館　2001年